字にはこだわらないようにして，大づかみに見る，という態度が必要です。

また，〔1〕の信頼区間から，次のことがわかります。

○　標本の大きさ n が大きいほど，$\frac{s}{\sqrt{n}}$ の値は小さくなりますから，信頼区間は小さくなり，精度の良い推定ができることがわかります。標本数 n が大きいということは，それだけ情報の量（質は抽出方法による）が多くなったということですから，当然のことです。

○　信頼度が95%から99%と大きくなりますと，$\frac{s}{\sqrt{n}}$の係数が，1.96から2.58と大きくなりますので，それだけ信頼区間が大きくなって，推定の精度はわるくなることがわかりますが，これは，できるだけ確実な判断をしようとすると，どうしても，あんな場合もこんな場合もと，起こりうる可能性のあるものを，全部ひっくるめて考えておかなければなりませんから，幅のある判断になってしまうということで，止むを得ないことなのです。

(注) 以下，数値計算では，≒のところも＝を用いて話をすすめます。

(例9) 下の表は，昭和50年度の運動能力テストの集計結果の一部である。

15歳男子走り幅とび			
区別	標本数 n	平均値 $\overline{x}$	標準偏差 s
県	1236	437.4	39.9
国	568	441.3	44.3

問1　県，国の平均値を，信頼度95%で区間推定せよ。

(解) ○　県の平均値の，信頼度95%の信頼区間は，

$$\overline{x}\pm\frac{2\ s}{\sqrt{n}}=437.4\pm\frac{2\times39.9}{\sqrt{1236}}=437.4\pm\ 2.3\quad より\ (435.1\ ,\ 439.7)$$

㊊ $\frac{2\times39.9}{\sqrt{1236}}$ の計算は，MC 1236$\sqrt{\ }$ (M＋) 2×39.9÷MR＝

逆数計算をすれば，もっと簡単なのですが，電卓の種類によって逆数計算の仕方がまちまちなので，メモリーを使った計算を書くことにします。